Ⅲ　施設計画

1　施設整備の基本的な考え方

（1）特別史跡加曽利貝塚との連続性の確保

・史跡や周囲の自然環境と調和しながら、遠方からも視認性の高い建築とします。
・史跡を臨む展望設備を整備し、加曽利貝塚の全景を見渡せるようにします。
・史跡や周辺のフィールドへ来館者を誘う、連続性の高い施設とします。

（2）博物館としての機能拡充

・貴重な収蔵資料を後世に継承するとともに、収蔵資料や他館からの借用資料などを安全に公開するため、文化庁による国宝･重要文化財の公開承認施設の基準に適合できる施設整備を目指すこととし、資料の搬入･搬出経路、収蔵環境や展示環境、防災計画などに配慮した施設とします。
・文化財ＩＰＭに配慮した施設計画とします。
・調査・研究機能の拡充を図るとともに、その一部をガラス張りにするなど、積極的に公開します。

（3）出会いや交流の場としての機能拡充

・コアエリア全体で来館者が一日中楽しく過ごすための起点として、出会いや交流の場となる「ミーツ（ＭＥＥＴＳ）」を整備します。全ての来館者が利用しやすい位置に設置することにより、来館者がコアエリアで展開している様々な事業に出会えるとともに、来館者や新博物館に関わる様々な人々が出会い、交流が生まれるきっかけを創出します。
・通常、バックヤードで行われる調査・研究やボランティアによる多彩な活動など、新博物館に関わる幅広い活動の様子に来館者が触れることができるよう工夫します。

（4）集客施設としての機能拡充

・公共交通機関を利用して来館しやすいよう、最寄り駅やバス停からのアクセスの拡充を図ります。
・自家用車や団体バスによる来館に対応するため、必要な駐車場面積を確保します。
・新博物館から史跡まで、来館者が快適かつ円滑に移動できる歩行空間を整備します。
・無料で利用できるスペースやキッズスペースなど、近隣住民が日常的に気軽に利用できる空間づくりを行います。
・市民や来館者の活動場所など、市民参画を促進するための機能を十分に確保します。
・多様な利用者に対応し、施設全体をユニバーサルデザインで計画します。
（千葉県福祉のまちづくり条例及び千葉市バリアフリー基本構想に準拠）
・省電力や排気・排水の管理などに配慮し、地球環境に負荷の少ない施設とします。
・自然災害の発生時には、来館者の安全確保を行うとともに、地域の避難・救助に寄与する役割を担えるよう、必要な場や設備を整えます。

2　施設計画検討に係る条件設定、候補地の条件整理

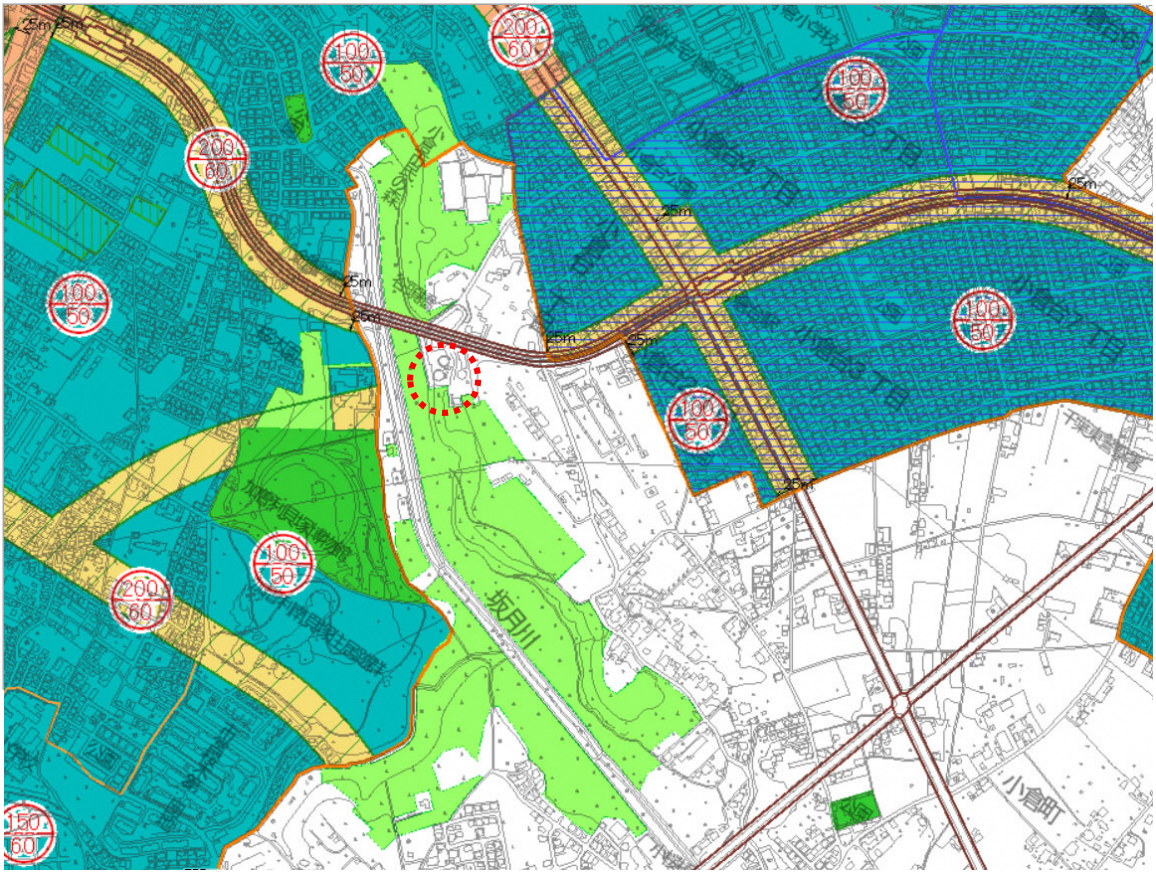
（１）敷地の位置

モノレールや幹線道路から視認性が高く、運営や集客の観点で効果的な活用方法が見込める旧小倉浄化センターを利用します。

敷地面積	旧小倉浄化センター部分 小倉町９３７番地７　　３，４５３．７９㎡ 小倉町９３７番地８　　４１３㎡ 特別緑地保全地区部分（市有地） 小倉町９３７番地９　　１，７５６㎡ 小倉町９５９番地　　１，５２０㎡の一部（法面部分）

（２）法的な基本事項

用途地域	市街化調整区域 建ぺい率　　：　６０％ 容積率　　：２００％ 道路斜線制限：勾配１．５ 隣地斜線制限：２０ｍ＋勾配１．２５
整備条件など	・坂月川流域は、「特別緑地保全地区」に指定されている

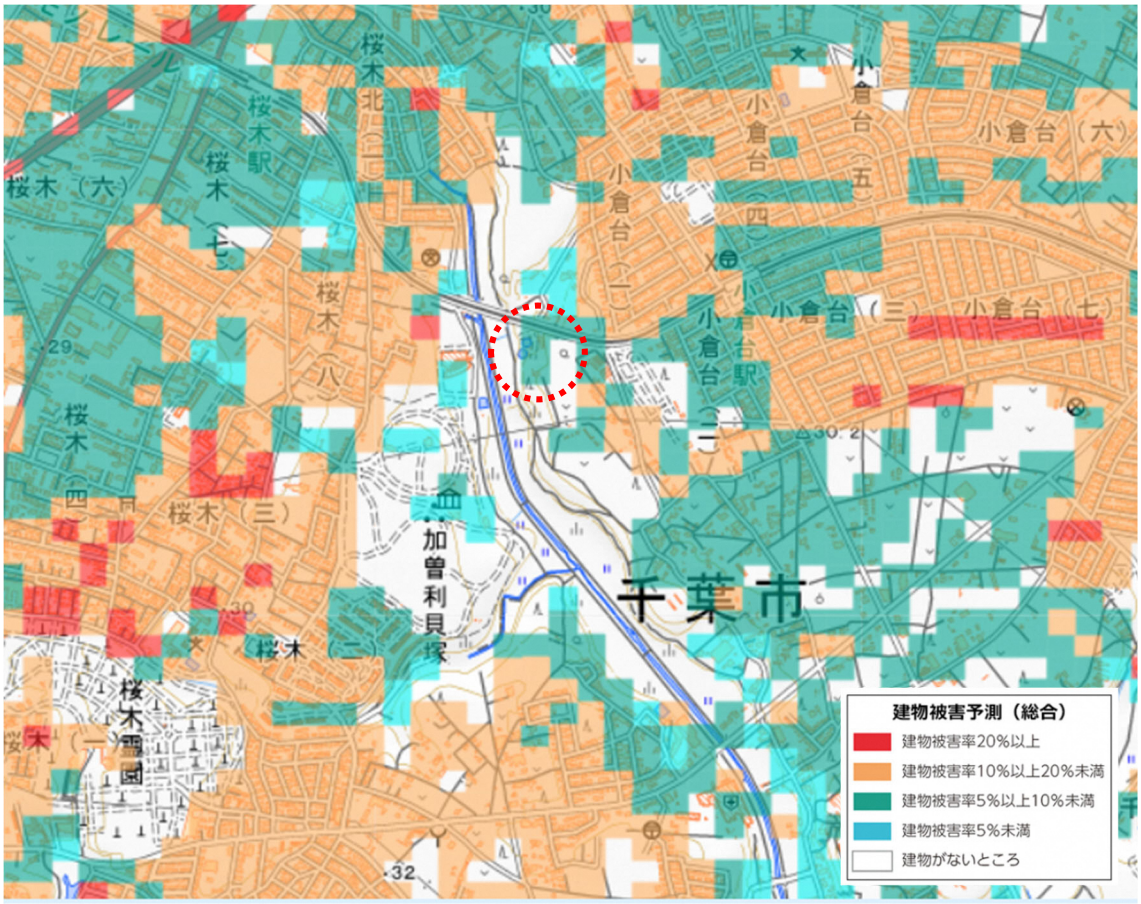


（３）自然災害の想定

ア　地震

＜建物被害予測（総合）＞

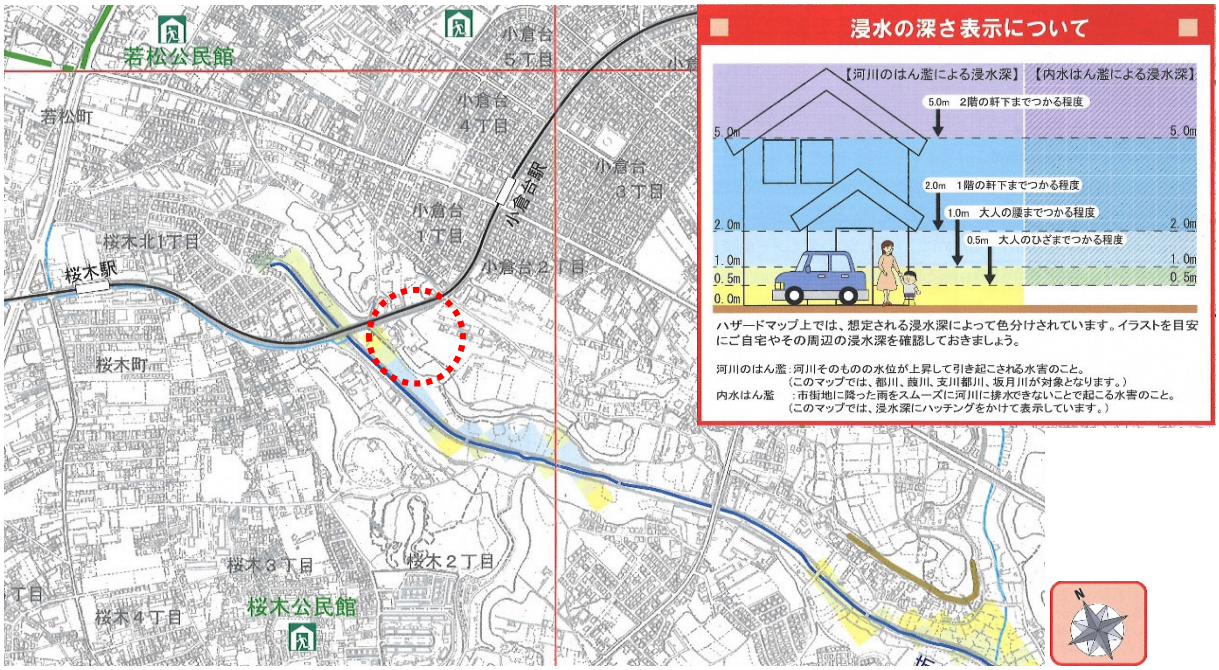
「千葉市ハザードマップ」によると、千葉直下地震（マグニチュード７．３）が発生した場合に、計画敷地（図中赤丸印）における揺れ・液状化・急傾斜地崩壊・火災によって建物が全壊・焼失する可能性は、５％以上１０％未満です。



千葉直下地震（マグニチュード７．３）が発生した場合の揺れやすさ（想定震度）は震度６強です。液状化の危険度は「なし（５段階の最低レベル）」、急傾斜地崩壊による建物全壊の危険度ランクは、予測されていません。

イ　洪水

「千葉市 都川水系浸水想定図」によると、計画敷地周辺における河川のはん濫による浸水深は０．５ｍと想定されています。



（４）自然災害発生時の対応

ア 来場者への対応

発災時に利用者（来館者）等の一時滞在機能を有する施設をめざします。

平常時：利用者等保護に関する防災計画の策定と職員等への周知、年 1 回程度の訓練を行います。

施設の安全確保、利用者等保護のための備蓄を行います。

発災時：利用者等の保護を行います。

適宜利用者等に対する情報提供を行います。

イ 周辺住民の支援

自然災害の発生時に、地域の避難・救助に寄与する役割を担い、周辺住民の方々に携帯電話の充電などの支援が行えるよう、必要な設備等を計画します。

3　諸室の構成

（1）諸室機能

部門	エリア	
	室名	概要・与条件など
収集・保存	出土資料収蔵庫	・加曽利貝塚の出土資料のうち、展示・閲覧対応の資料を中心に収蔵 ・一部をオープン収蔵庫とすることを検討 ・空調設備、収蔵庫扉、収蔵棚を備える
	写真図面収蔵庫	・写真や図面などの二次資料の保存
	特別収蔵庫・前室	・特に厳密な温湿度管理が必要な資料を保管 ・恒温恒湿空調、ガス消火設備、収蔵庫扉、収蔵棚を備える
	一時保管庫・前室	・他館からの借用資料の一時保管、温湿度環境に適応させるための慣らしを行う ・恒温恒湿空調、ガス消火設備、収蔵庫扉を備える
	搬入口・トラックヤード・荷解室	・資料の搬出入や荷解き作業を行う ・搬入口は専用とする。4ｔトラックを収容できるトラックヤードを設け、閉鎖空間で資料の搬出入を行うために必要な設備を備える
	作業室・倉庫	・受け入れ資料の確認、登録作業、資料貸出に係る梱包作業等を実施 ・梱包材等の資材を保管する倉庫を併設
調査・研究	研究室	・学芸職員の執務空間 ・客員研究員、市民研究員による研究にも利用
	ミーティングルーム	・学芸職員の会議、研究セミナーなどを開催
	図書室	・研究図書を保管する ・集密書架を導入する
	収蔵資料整理室	・収蔵資料の整理、調査、修復作業などを行う
	発掘資料整理室	・発掘資料の整理、調査、記録作業などを行う
	分析研究室	・資料の分析を行う ・分析に必要な機器や標本収納室を備える
	保存研究室	・資料の保存処置や保存に関わる研究を行う ・必要な機器を備える
	撮影室	・資料の写真撮影を行う

部門	エリア	
	室名	概要・与条件など
展示・体験	常設展示① 加曽利ＬＡＢ	・実物資料の展示、考古実験等の体験を行う ・温湿度管理空調を備える ・実物資料を展示するための展示設備（展示ケース、展示用照明設備等）を設ける ・調査・研究ゾーンで行われている学芸職員の作業の様子を見られるよう、配置を検討
	常設展示② ＪＯＭＯＮＩＡ	・縄文時代のムラを再現した空間で、縄文の暮らし体験を行う ・ムラの景観を演出するため、できる限り天井高を確保する（有効天井高７ｍ以上）
	常設展示③ 未来ラウンジ	・来館者と学芸職員、来館者どうしが語り合う、対話の場 ・活動の記録を蓄積し展示するアーカイブ機能を備える ・オンラインでの対外的な情報発信やコミュニケーションの拠点として必要な設備を備える
	企画展示室	・国宝や重要文化財を含む他館からの借用資料や収蔵資料を活用した企画展・特別展を開催する ・公開承認施設の基準に適合するよう、搬入口から企画展示室までの資料動線に対して、特に配慮した配置とする ・貴重な資料を安定的に展示できるよう、温湿度管理空調、ガス消火設備、展示用照明設備、エアタイトケースを備える ・多様な展示に対応できるよう、可動間仕切を備える
	コレクション 展示室	・寄贈・寄託された日本全国の貝塚関連資料など、館のコレクション資料の展示を行う ・貴重な資料を安定的に展示できるよう、温湿度管理空調、ガス消火設備、展示用照明設備、エアタイトケースを備える
	史跡ガイダンス 展示室	・特別史跡加曽利貝塚を見学する起点として、加曽利貝塚の出土資料を通じ、その全体像を伝える
	展示ロビー （導入展示）	・常設展示や企画展示へのきっかけとなる展示として、実物資料（厳密な温湿度管理が不要な資料等）展示などを行う
	展示準備室・ 備品倉庫	・展示準備作業を行う ・展示備品の保管用倉庫を備える

部門	エリア	
	室名	概要・与条件など
教育・普及	体験学習室	・調理を含む体験学習を行う ・１クラスが同時に活動できるよう、必要な設備を備える ・水や火気を利用するため、実物資料を扱うゾーン（収集・保存ゾーン、展示･体験ゾーン等）と充分離して配置する
	講堂	・セミナーやワークショップを開催する ・映像・音響設備を備える ・２クラス同時に利用できる設備を備える
	活動ルーム	・博物館友の会、土器づくり同好会、ガイドの会のメンバーや市民研究員の活動スペースと控え室を兼ねる ・作業机、ロッカー、コピー機等を備える
	レファレンスルーム	・書籍の閲覧、情報検索 PC の利用、学習相談 ・書架、PC 端末を備える
	図書室	・開架式書架を導入する
	土器づくり工房（別棟）	・土器づくり同好会の活動、一般来館者による土器づくり体験を行う ・粘土や薪の保管室、作業台、乾燥棚、土器サンプル展示台等を備える
集客・交流 ［ミーツ（MEETS）］	ミュージアムショップ	・新博物館の刊行物、体験に必要な道具類、オリジナル商品、土産物、軽食などを販売
	飲食可能なコミュニティスペース（カフェ併設）	・縄文をテーマにした飲食メニューを提供 ・飲食スペース、倉庫等を備える ・水を利用するため、実物資料を扱うゾーン（収集･保存ゾーン、展示･体験ゾーン等）と充分離して配置する
	史跡ガイダンス	・史跡全体や見どころの紹介、見学ルート案内などを行う
	映像ルーム	・史跡や新博物館の紹介映像やイベント時などの特別映像の上映を行う ・団体来館者の昼食場所としても利用
	キッズコーナー	・未就学児が安全に遊びながら縄文文化や貝塚に親しむ
	展望スペース（屋外）	・貝塚と富士山を望む展望を実現する

部門	エリア	
	室名	概要・与条件など
管理	館長室・応接室	・館長の執務室。応接室を兼ねる
	事務室	・事務職員の執務室
	会議室	・事務職員やスタッフの会議を開催 ・博物館の運営に関わる全員が参加する会議が行える設備を備える
	スタッフ室	・事務職員以外のスタッフの執務室
	ガイド待機ルーム	・史跡ガイドや博物館ガイドの待機スペース
	警備員室	・警備員の執務室 ・セキュリティ設備のほか、警備員の休憩スペースも備える
	その他	・職員用トイレ、湯沸室、更衣室、倉庫等
共用 電気・機械	エントランスホール・受付	・来館者に対する案内・受付等を行う ・救護室、授乳室、トイレなどの機能を備える
	倉庫・資材室	・備品や資材の保管を行う
	その他	・廊下、階段、エレベーターなど
	機械室	・中央監視室、空調機械室、電気設備室、給排水設備など

参考：公開承認施設の条件

Ａ．組織等
Ａ－１．重要文化財の保存・活用について専門的知識をもつ施設の長。
Ａ－２．学芸員の資格を有し、文化財の取扱いに習熟した専任者２名以上。
Ａ－３．施設全体の防火及び防犯の体制。

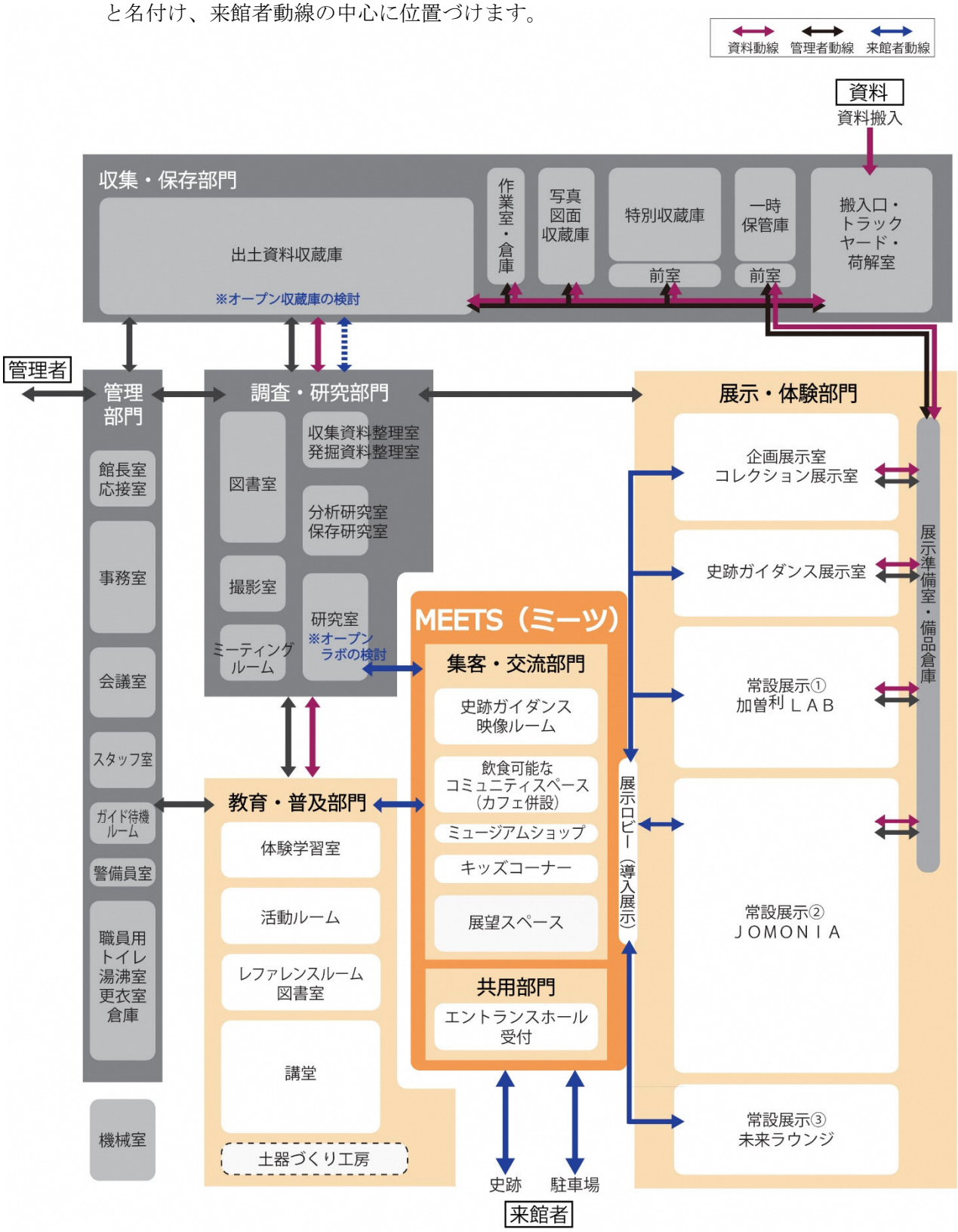
Ｂ．施設・設備
Ｂ－１．耐火耐震構造。
Ｂ－２．内部構造の用途（展示・保存・管理）毎の区分、及び防火措置。
Ｂ－３．温度、相対湿度、照度について、適切な保存環境を維持できる設備。
Ｂ－４．防火及び防犯の設備。
Ｂ－５．観覧者等の安全を確保するための十分な措置。
Ｂ－６．同一の建物内で、他の施設（商業施設を除く）と併設の場合：文化財の保存・公開に係る設備が、専用のものであること。
Ｂ－７．同一の建物内で商業施設と併設の場合：文化財の公開を行う専用の施設として商業施設から隔絶（非常口を除く）していること。

Ｃ．その他
Ｃ－１．申請前５年間に、重要文化財の公開を適切に３回以上行った実績がある。

（２）機能構成

次の機能構成図に基づく機能配置や動線計画を実現します。特に、資料動線については、専用の搬入口を設置し、資料を安全に展示室まで移動できる独立した動線とすることが重要です。

また、新博物館の４つの基本事業をつなぐ「集客・交流部門」を「ミーツ（ＭＥＥＴＳ）」と名付け、来館者動線の中心に位置づけます。



Ⅳ　展示・体験計画

1　展示・体験の展開方針

（1）調査・研究成果を反映

・貴重な実物資料を間近で詳細に観覧できる展示環境を整備します。

・調査・研究の成果を反映し、学術的な裏付けに基づき、常に更新し続ける展示・体験を実現します。

・活発な調査・研究活動と連携し、最新の調査・研究の成果やその解明されるまでのプロセスや、研究手法にも触れられる、ライブ感のある展示・体験を目指します。

（2）主体的な体験を重視

・情報を一方的に伝えるのではなく、来館者が興味に合わせて自ら考えたり、試したり、調べたりしながら学ぶことができる体験型の展示を目指します。

・縄文文化や貝塚に対して、より身近なこととして興味を持てるよう、来館者の主体的な体験を重視します。考古学の目線での「探究」や、縄文時代の世界への「没入」、縄文文化から今の暮らしや未来を考える「対話」といった体験の手法を効果的に用いることで、新博物館全体で縄文時代に親しめる構成にします。

・断片的な展示・体験ではなく、展示どうしや史跡までをつなぎ、回遊性を高めるストーリーや、来館者が体験を重ねることで、ステップアップできる仕組みを用意し、満足度と新たな学びへの意欲を高めます。

（3）多様な興味・関心や幅広い客層への対応

・様々な興味・関心を持つ人々が、縄文時代や加曽利貝塚について深く知り楽しめるよう、各自の興味に合わせて好きなところから見学ができ、心ゆくまで滞在できる構成にします。

・館内の展示・体験と史跡内での体験を総合的に検討することで、来館者の幅広い興味や要望に応えつつ、様々な体験を組み合わせることにより学びを深める相乗効果を生み出します。

・展示室の観覧環境、展示手法、解説手法など、展示・体験に関わる様々な事柄について、ハード・ソフトの両面からユニバーサルデザインに配慮した整備を行います。

2　テーマ構成

展示は、常設展示、企画展示、史跡ガイダンス展示、コレクション展示で構成します。さらに、各展示への興味を喚起する導入展示を館内の各所で展開します。

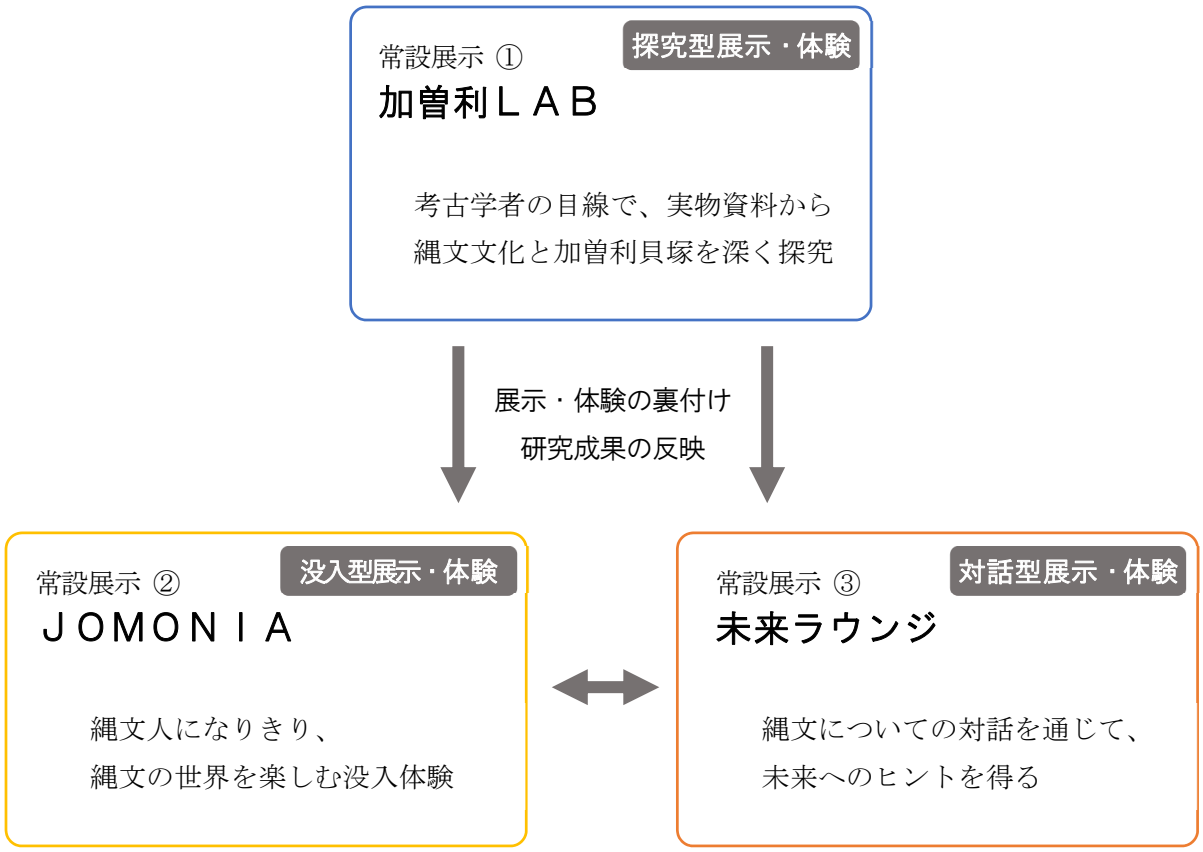
（1）常設展示

博物館で行われる日々の調査・研究を基に、加曽利貝塚だけでなく全国の貝塚や千葉の縄文遺跡を広く扱い、東京湾の大型貝塚群の価値と縄文文化の魅力と重要性を広く発信します。日々の研究の進展を反映して、展示内容も更新・発展していきます。

展示の中核となる探究型展示・体験「加曽利ＬＡＢ」、最新の研究成果や探究型展示での検証などを反映させた没入型展示・体験「ＪＯＭＯＮＩＡ」、対話型展示・体験「未来ラウンジ」の３つの展示エリアで構成し、来館者が興味や関心に応じて、自由に見学ができるようにします。

また、来館者の展示内での体験及び活動並びにワークショップでの発見が、博物館の新たな展示や調査・研究にもつながるような、来館者と研究の距離が近い博物館を目指します。

＜全体構成案＞



ア　探究型展示・体験「加曽利ＬＡＢ」
～考古学者の目線で縄文文化と加曽利貝塚を深く探究～

・出土資料をもとに、貝塚を中心とした縄文時代の社会や文化を解明する４つのテーマを展開し、加曽利貝塚のみならず、全国の貝塚と千葉県の縄文遺跡を紹介します。
・縄文文化や貝塚研究の拠点として幅広く調査研究や資料収集を進め、その進展や発展に応じて、展示のテーマや内容を継続的に更新していくため、可変性・拡張性のある展示を目指します。
・展示ケース、照明、空調など、貴重な出土資料の保存環境に配慮した展示環境を整備するとともに、縄文時代の生活の様子などは、必要に応じてジオラマ模型や映像などの二次資料を組み合わせることで、広がりのある分かりやすい展示を実現します。
・さらに、来館者が調査・研究の一端を体験できる「アクティブラボ」、学芸職員などの作業エリアを公開する「オープンラボ」を併設し、調査・研究のライブ感を伝えます。

（ア）展示室
＜展示テーマ案＞

大テーマ	中テーマ
貝塚を知る 縄文時代の貝塚から弥生時代以降、そして世界へと地域を広げて貝塚の特徴や多様性を紹介する。	列島各地の貝塚 弥生時代以降の貝塚 世界の貝塚 貝塚の発掘と分析
貝塚と縄文社会 全国の1/4の貝塚が集まる千葉とその周辺にある貝塚の特徴、貝塚研究から明らかになった縄文の文化や社会を紹介する。	房総の海と台地 貝塚文化のあけぼの 東京湾漁撈の幕開け 中期大型貝塚群と内陸集落群 後期大型貝塚とネットワーク社会
縄文ムラのくらし 縄文時代の暮らしの営みの様子を、読み解いた実験や思考などのプロセスとともに紹介する。	大型貝塚とはなにか ムラ・里・海 定住を支えた食と資源利用 魚貝類の利用 植物の利用 狩りとイヌ 埋葬と縄文人のからだ いのり・まつり・装い
加曽利貝塚の魅力 加曽利貝塚の発掘や保全の歴史、研究で明らかになった成果や、今後の研究の展望などを紹介する。	加曽利貝塚のあゆみ 加曽利Ｅ式土器と加曽利Ｂ式土器 加曽利貝塚の発掘と研究

（イ）アクティブラボ

・学芸職員が最新の研究結果の発表を行ったり、来館者が出土資料の調査・分析などの研究の一部を体験できる場を整備します。加曽利貝塚で実績のある「実験考古学」を実践し、考古学研究の裾野を広げる役割も担います。

・個人で行う調査から、体験サポーターによるワークショップまで、様々な体験が行える場とします。

・情報検索端末などを設置することで、館や関連施設の収蔵資料について調べられる環境を整備します。

・市民が調査・研究に参加し、その成果を発表する場としても活用します。

アクティブラボ（手前）

＜体験例＞

① 出土した貝の種類を図鑑で調べ、現在の千葉の海岸で採れる貝殻と比較する

② 粘土板と縄で模様をつける体験から、出土した土器に使われた縄目を推定する

③ 出土資料から、縄文人の食事メニューを推定する

④ 日本各地の加曽利Ｅ式土器を比較し分類する など

図鑑を見ながら、出土した貝殻と
現在の千葉の貝を比較する

縄文土器の形と現代の様々な容器を比べて、
土器の用途を推定する

粘土板に縄で模様をつけながら、
土器の縄目を推定する

（ウ）オープンラボ

・学芸職員やスタッフなどが活動する諸室の一部を、来館者が窓越しに作業風景を見学できるよう整備し、博物館で行われている調査・研究のライブ感を伝えます。

＜公開する内容の例＞

①学芸職員が行う縄文時代に関する研究

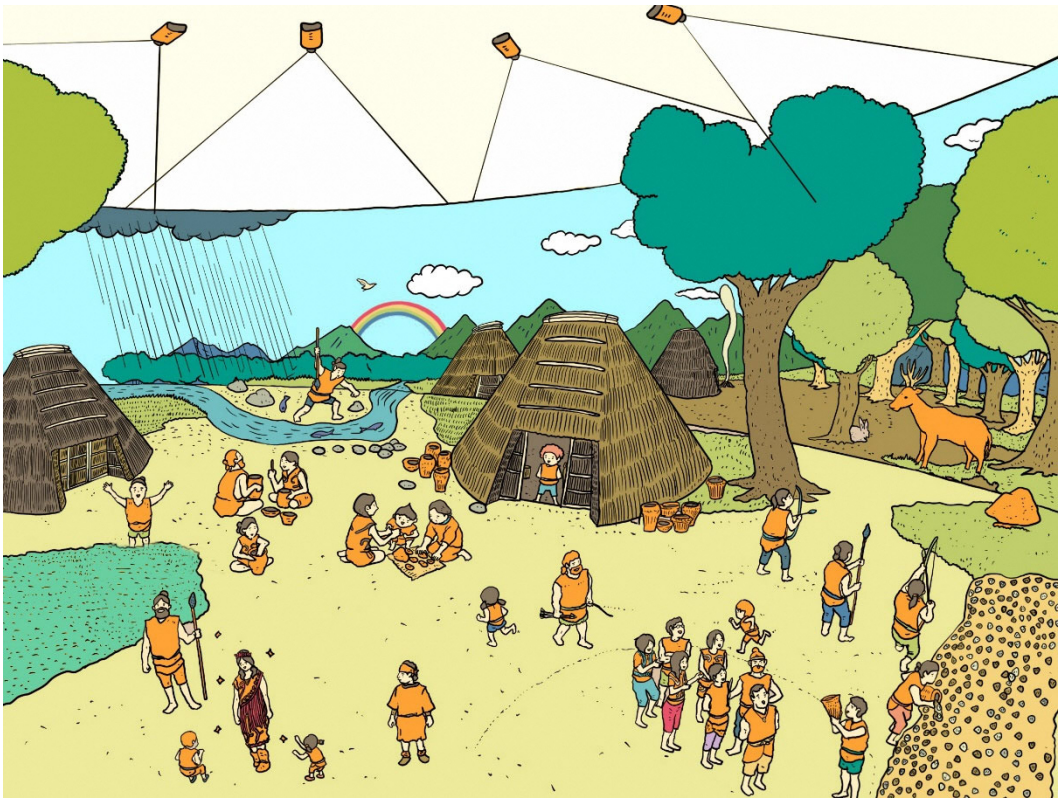
②加曽利貝塚出土資料の整理・分析作業

③収蔵資料の整理・修復作業

④企画展示などの展示準備作業　等

イ　没入型展示・体験「ＪＯＭＯＮＩＡ」
～縄文人になりきり、縄文の世界を楽しむ没入体験～

・縄文時代の加曽利のムラとフィールドを再現した空間で、縄文人になりきって縄文の暮らしや文化を体験する展示を展開します。
・室内の大空間に縄文時代の風景を再現することで、時間や季節の移り変わり、気象の変化などの演出も合わせて、縄文の世界観や没入感を生み出し、遺跡だけでは味わえない体験を提供します。縄文時代の様々な要素や場面が一つの空間内で展開されることで、来館者はそれぞれの体験を、環境や生活の中の一部としてとらえることができます。
・再現空間内の住居や道具は、素材などをできるだけ忠実に再現し、覗きこんだり、触ってみるなど、幅広い年代の来館者が思い思いに楽しめるようにします。それぞれの場には、史跡内での本格的な体験に向けた導入として、関連した体験メニューも用意します。
・デジタル技術の導入により没入できる空間演出と、来館者が考えながら手を動かして体感するアナログの体験の両方を重視し、バランスよく盛り込みます。また、体験内容に精通した「縄文キャスト」が案内役として体験をサポートすることで、体験を充実させるとともに、場の世界観を盛り上げます。
・屋外での体験とは異なり、全天候型で、暮らしの流れをひとつながりで体験できることを重要視します。史跡内での体験メニューと行き来をしたり、探究型展示・体験「加曽利ＬＡＢ」の展示内容を体験することによる相乗効果で、縄文時代への理解を深めます。



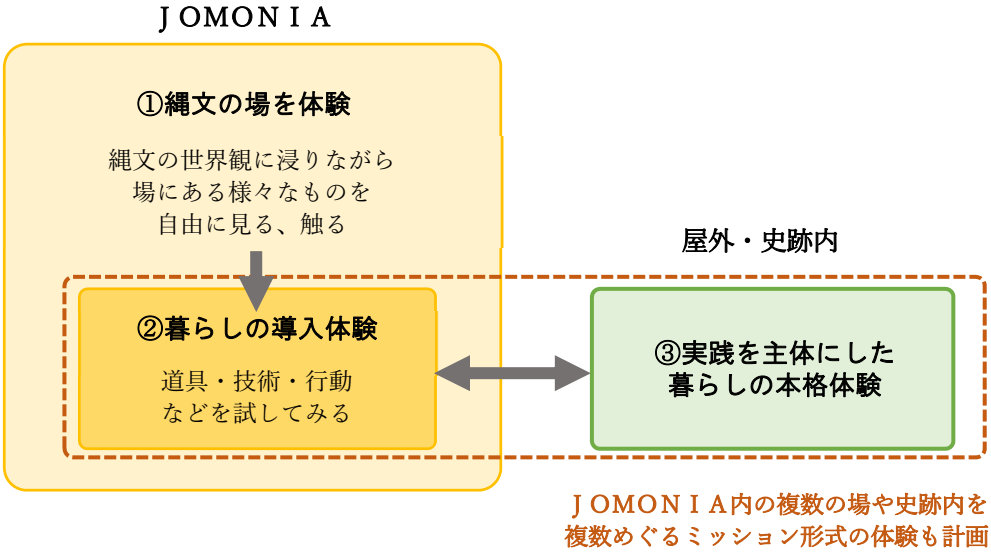
没入型展示・体験「JOMONIA」の空間イメージ

（ア）ＪＯＭＯＮＩＡにおける体験の構成案

・史跡での単体での体験では理解しにくい時間や季節に応じた暮らしや、距離・空間を超えたムラの広がりなどをリアルに体感しながら学べる場として整備します。

・いつでも、誰でも気軽に参加でき、来館者が興味・関心に応じて知識や経験を深めることができるよう、体験の深度やつながりを重視します。

・ムラの再現空間の中で、複数のメニューをひとつながりに体験したり、他の来館者や縄文キャストの活動を見学したり、協力して一緒に活動することで、主体的で臨場感の高い体験を実現します。



（イ）ＪＯＭＯＮＩＡと屋外・史跡内における体験のすみわけ

・屋外・史跡内での体験の性格を分けることで、それぞれの特徴を活かして、より効果的な体験を実現し、相乗効果が得られるように総合的に計画します。

	JOMONIA	屋外・史跡内
場のあり方	・再現された縄文時代の加曽利ムラの中で体験	・現在の史跡の自然の中で体験
学び・効果	・知識の習得、全体の流れや手順・構造の理解	・知識・技術の習得、実践
対象者	・初心者でも安心して参加できる ・屋外・史跡内の体験の導入的機能も担う	・関心の深い来館者が対象 ・一部に年齢制限あり
時間、季節 天候　等	・デジタル演出により複数の時間帯・季節・天候の体験を同時にできる	・季節や時間に合わせて体験 ・雨天中止のメニューもあり
場所	・距離・空間を超え複数の場所を巡る体験が可能	・基本的に一つの場所で体験
手法	・アナログ(レプリカや模型)＋デジタル	・アナログ中心、本物の材料が多い
体験の形態	・出入り自由、自分のペースで進められる ・時間指定のプログラムも実施	・定時開催、数時間かかる ・講師が主導し参加者全員で進める
広がり･深さ	・複数の体験をひとつながりで行い知見を広げる	・一つの体験に集中して深める
水と火	・基本的には使用しない	・たき火等も含め使用可能

（ウ）場の構成要素と体験内容の例

・ＪＯＭＯＮＩＡ内の再現空間を活用し、館内での実施にふさわしい多様な深度の体験を展開します。暮らしの導入体験については、日ごとに実施メニューを組み替えたり、研究の進展に新しい体験メニューを追加するなど、運用の自由度が高いものとします。

場	場を体験（見る、触る）	暮らしの導入体験（試してみる）
① 竪穴住居	・住居内に入る、座る ・道具類を触って観察する ・炉に土器を据える	・住居を組み上げる ・アンギン編み ・季節の食材を組み合わせたメニューを作る
② 広場	・狩りの道具を作る（実演） ・土器に触ってみる ・星空観察と夜の暗さを体験する	・石斧などの道具を組み立てる ・石器でドングリをすりつぶす ・土器に原体で紋様をつける ・物々交換で必要なものを調達する
③ 貝塚	・貝殻を捨てる	・壊れた土器や道具を送る ・土偶を破壊して送る ・犬を埋葬する ・まつりで踊る
④ 森	・森の動植物を発見する ・時間や四季の変化を感じる	・木の実を採集する ・作戦を立てて狩りをする ・材木を切り出す
⑤ 坂月川	・舟着場の舟から荷揚げする ・水の入った土器を持ち上げる	・丸木舟をつくって乗ってみる ・丸木舟を漕いで海まで下る
⑥ 海	・波や潮の満ち引きを感じる	・食用の貝を採集する ・網や釣竿をつかって魚を釣る

＜空間や体験の演出手法の例＞

① 四季や天気、時間の演出

プロジェクションマッピングや効果音などを用いて、様々な環境を再現する

② 狩りや舟漕ぎ等の体験

インタラクティブ映像やバーチャル映像などを盛り込み、坂月川を下って海に出るなどの、屋外では実際の実施が難しい体験を可能にする

③ 道具や土器などのアイテム

素材感や重さを再現したレプリカで、体験のリアリティを高める

「JOMONIA」の体験イメージ

星空観察と夜の暗さを体験する
（映像と照明演出）

・電気のない夜の暗さとその中で暮らす工夫を学ぶ。
・縄文人が見ていたであろう星空を眺める。

作戦を立てて狩りをする
（インタラクティブ映像）

・事前に考え、狩りを成功させるための作戦を立てる重要性を学ぶ。（メンバーの役割分担、時間帯や場所を選ぶ、ふさわしい道具を選ぶ、落とし穴を掘る、等）
・メンバーの協力や事前の作戦と、狩りの成果をあわせて、よりよい成果を得られるための工夫を考える。

＜ミッション形式メニューの例＞

発展形の体験として、ＪＯＭＯＮＩＡ内の複数の場や史跡内での体験を組み合わせることで縄文の暮らしをひとつながりでとらえることができる、ミッション式のプログラムも計画します。

① イボキサゴでスープを作ろう！
　海でイボキサゴの採集（ＪＯＭＯＮＩＡの海）
→スープの具材と薪の調達（ＪＯＭＯＮＩＡの森）
→土器に水をくんでくる（ＪＯＭＯＮＩＡの坂月川）
→調理ワークショップと試食（屋外又は体験学習室）

② 弓矢を作って森で狩りをしよう！
　鏃の製作ワークショップ（屋外又は体験学習室）
→作戦を立てて狩り（ＪＯＭＯＮＩＡの森）
→動物の部位ごとの使い方を学ぶワークショップ（ＪＯＭＯＮＩＡの広場）
→物々交換で別の物資を調達（ＪＯＭＯＮＩＡの広場）

③ 服を作って着よう！
　材料のカラムシを採集（屋外・史跡内）
→アンギン編み・縫製・装飾（ＪＯＭＯＮＩＡの竪穴住居）
→試着（ＪＯＭＯＮＩＡの広場）

ウ　対話型展示・体験「未来ラウンジ」
～縄文についての対話を通じて、未来へのヒントを得る～

・縄文時代の価値観と楽しく自由な発想で現代をとらえ直し、未来にとって大切なものを考え、語りあう場として計画します。
・ワークショップなど、多様な目的や形態で活用できるようにし、来館者同士の交流や活動の場として提供します。
・ワークショップなどの活動の成果、来館者のアイデアや意見などをアーカイブ化し、展示として反映することで、参加していない人にも活動を広く紹介し、参加する意欲を盛り上げます。活動の成果が貝塚のように目に見える形で蓄積することで、時間の経過に伴って充実していく展示を目指します。
・掲示板などを用いて、来館者やスタッフの経時的な対話や意見交換を行い、リピート利用にもつなげます。
・オンラインで館の活動紹介や体験プログラム、発掘調査現地説明会の様子を配信したり、地域の学校や国内外の博物館等と繋ぐプログラムを開催するなど、来館していない人も対象に取り込む情報発信やコミュニケーションの拠点としても位置付けます。そのために必要な配信のためのスタジオや設備等を計画します。

対話型展示・体験「未来ラウンジ」の空間イメージ

（ア）縄文トークテーブル

問いかけを基に自由に発想するワークショップや創作活動、活動の成果発表などを行える多目的スペースを整備します。

また、複数のテーマを入れ替えながら実施し、その結果を蓄積し、公開します。

＜活動のメニュー例＞

① 縄文ギャラリー：出土資料の展示と、縄文をテーマにした創作活動
（例：縄文の美に啓発されたアート作品の展示、即興演奏会 等）

② 縄文問答：縄文時代の価値観で現代の当たり前を再考する展示
（例：「お金や文字がないと生活はどうなるか」などのテーマ設定に対して考えた内容をカードに記入、掲示する）

③ 未来考古学：５，０００年後の未来人の視点で現代をとらえ直すワークショップ
（現代の工業製品などが５，０００年後に発掘されたら、未来の人々はそれを見て用途などをどのように推定するかを考えてみる）

④ 活動紹介：活動団体の活動紹介や成果発表、メンバー募集 等

「未来考古学」のイメージ
『もし５，０００年後にマウスが発掘されたら、未来の人は何だと思うだろう？』

（イ）活動アーカイブス「私たちの貝塚」

５，０００年後の未来に残したい大切なものやメッセージを収め、展示します。

また、活動の成果を貝塚のように蓄積しアーカイブ化することで、参加と閲覧の双方向で楽しめる展示になります。

＜テーマ例＞

① 地域に伝わる知恵や教え

② 大切にしたい風景や自然、文化、伝統

③ 未来へのプレゼント　等

（２）企画展示

縄文時代に関する企画展や特別展を開催し、加曽利貝塚の発掘調査の成果、縄文文化研究及び貝塚研究の成果を紹介します。

また、巡回展も積極的に誘致し、知名度の向上や集客数の増加につなげます。多様な資料の展示に対応できる、可変性の高い展示什器と、公開承認施設としての保存・展示環境を整備します。

（３）史跡ガイダンス展示

特別史跡加曽利貝塚を見学する起点として、加曽利貝塚の出土資料を通じ、その全体像を伝える展示を行います。

常設展示と別に、来館者をスムーズに史跡見学へ導くよう、見学動線を踏まえて整備します。

（４）コレクション展示

これまで収集してきた寄贈・寄託資料を中心に、館のコレクション資料を展示します。さらに、新たな収集資料の展示なども行い、更新性の高い展示とします。

（５）導入展示

館内の共用エリア「ミーツ（ＭＥＥＴＳ）」をはじめとする各所で、常設展示や企画展示などへの興味を喚起するきっかけとなる展示を展開します。

発掘や研究の最新情報などを紹介する展示、展示の楽しみ方のヒント、問いかけなどにより、より多くの来館者を展示室へと誘います。

（ア）５，０００年タイムトラベル

映像で、加曽利貝塚周辺に縄文人が暮らしていた５，０００年前から現代までのこの場所の歴史を映像でダイナミックに順にたどり、縄文時代が他の時代に比べて、いかに長く安定していたかを体感できる内容とします。

映像「５，０００年タイムトラベル」のイメージ

３　解説計画

（１）多言語対応

外国からの来館者が楽しめるよう、多言語での解説を検討します。また、ピクトグラムなどの文字によらない手法を取り入れます。

（２）子ども解説

子ども用の解説パネルやワークシートなどの導入を検討し、学校団体での利用や調べ学習にも対応します。

（３）ユニバーサルデザイン

展示の高さの配慮、触れる展示の導入、音声や点字による解説、カラーユニバーサルデザインの導入などを検討し、多様な人々が楽しめる展示を実現します。

（４）世界観に合わせた解説手法

展示エリアの世界観を重視した解説手法で、体験性や学びをより充実させます。

＜例＞

①　探究型展示・体験「加曽利ＬＡＢ」

展示解説の中に学芸職員の視点や言葉を盛り込むなど、来館者が縄文の研究活動を身近に感じられるよう工夫します。

まだ解明されていない事柄や、研究者によって意見が分かれる仮説などもその旨を併記しながら紹介することで、貝塚研究や縄文文化研究の奥深さを示します。

また、来館者の積極的な探究を促すため、問いかけを効果的に使った解説を計画します。

②　没入型展示・体験「ＪＯＭＯＮＩＡ」

文字による解説を最小限に止め、体験に必要な情報をエリア内のサポートスタッフなどから聞き取りながら参加することで、文字のなかった縄文の暮らしを実体験できます。

③　対話型展示・体験「未来ラウンジ」

問いかけ形式でのテーマ提示により、来館者の参加と自発的な思考を促します。

また、学術的な正解ではなく、来館者の意見や考えを集めて展示に反映させることで、より深い思考や来館者同士の交流につなげます。

Ⅴ　管理運営計画

1　管理運営に係る基本的な考え方

（1）調査・研究体制の強化

・縄文文化と貝塚に関わる研究の拠点施設としてふさわしい調査・研究体制を実現するため、館内の調査・研究体制を拡充するとともに、史跡や収蔵資料などの研究資源化を推進し、外部研究機関や研究者との連携の拡大を図ります。

（2）「みんなでつくる・育てる博物館」を体現する運営体制の構築

・関係機関や市民など多様な主体の参画による博物館活動を展開するために必要な運営体制を構築します。

・これまでの取組みで構築されてきた市民やサポーターによる活動をより一層支援し、その活動の活性化を図るとともに、新たな取組みや参画の仕組みを導入し、より多くの参画を促進します。

（3）活発な博物館活動を持続的に展開するための工夫

・長期にわたり活発な事業活動を展開できるよう、民間活力の導入などの最適な手法を検討し、効率的な運営の仕組みを構築します。

・新博物館の活動や運営に対する市民や利用者の声を的確にとらえ、運営や整備に反映できる評価・改善システムのあり方を検討します。

・事業活動の展開にあたり、企業協賛や収益力の拡大などの外部資金の確保に向けた取組みを積極的に展開します。

（4）市民や利用者の満足度を高める運営の実現

・高齢者や障害者、子どもたちなど、誰もが利用しやすい施設を目指し、多様な利用者や利用形態に対応したきめ細やかなサービスを提供します。

・誰もが気軽に利用できるよう、市民や利用者の立場に立った開館時間や利用料金などを検討します。

2　管理運営方式

新博物館の運営方式については、民間活力の導入も選択肢の一つとしてとらえ、今後の検討において最適な手法を選定する必要があります。

現時点で想定できる公共施設の整備・運営手法の特徴やメリットを活かして、新博物館の運営に最適な手法を選定するため、次の条件を踏まえた検討を行います。

（１）貴重な資産の保全・継承、活用に向けた持続性や専門性の確保

特別史跡や貴重な自然環境を保全し、次世代に継承するともに、未来に向けた活用を図るためは、博物館としての中長期的な活動方針に基づき、学芸職員をはじめとする専門職員が責任感や高い意識を持って安定的・持続的に活動できることが求められます。こうした環境を実現でき、専門職員の育成やノウハウの蓄積・継承を図ることが重要です。

（２）公益的視点に立った連携体制の確保

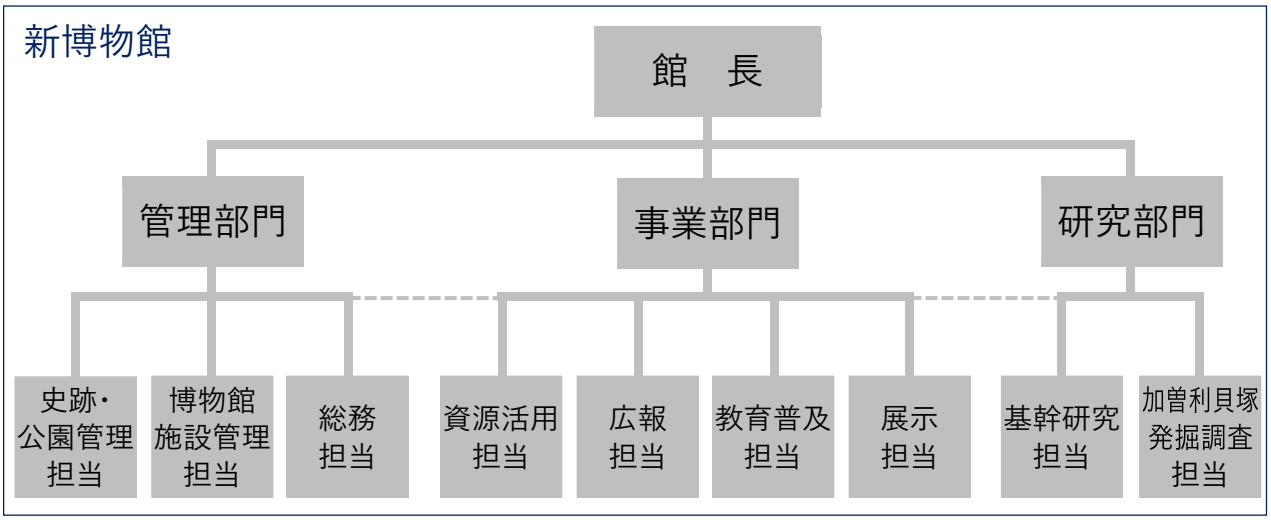
周辺エリアと連携したサテライト周遊ネットワークを実現するためには、地域振興の牽引役として、多様な主体とのネットワーク構築が求められます。こうした公益性の高い事業を展開するとともに、具体的な連携事業の展開に必要なノウハウを提供できることが求められます。

（３）市の施策との連動、効率性の確保

千葉市の文化振興施策や地域振興施策を反映した運営が求められます。加えて、高いレベルでの博物館活動を行いながら、運営の効率化を図り、運営コストの軽減を達成できるような運営のあり方を考えていくことが求められます。

3　組織体制

事業活動を展開するためには、次のような組織体制の構築が望まれます。具体的な組織のあり方については、運営方式と併せた検討が必要です。



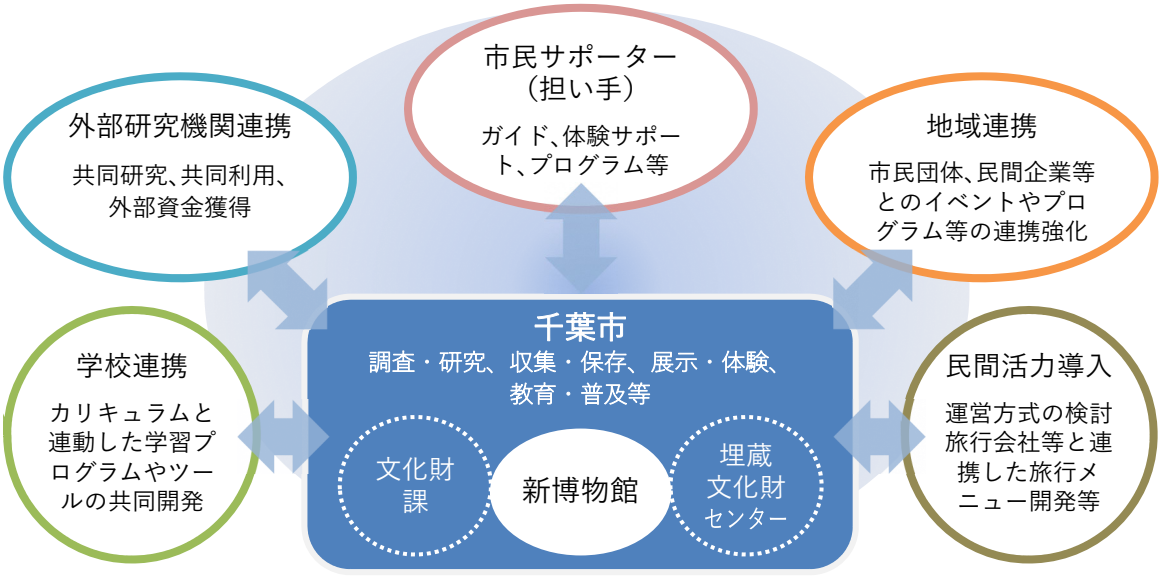
（各担当の主な業務）

部門	担当	主な業務分担	展示	研究資源化	市民協働
管理部門	史跡・公園管理担当	史跡・公園・植栽の管理	－	－	史跡・公園の維持管理
	博物館施設管理担当	施設維持管理、空調設備運用管理、文化財ＩＰＭ管理	－	－	文化財ＩＰＭ日常管理
	総務担当	総務・庶務、人事	－	外部資金管理	－
事業部門	資源活用担当	収蔵資料・資料データベースの整理・保管・利用、大学等外部研究機関との連携、研究紀要等の編集	資料情報や資料の提供	大学等との共同研究・共同利用の受入	市民等との共同研究・共同利用の受入
	広報担当	広報、Ｗｅｂサイト・ＳＮＳ更新、年報等の発行、集客・交流、サテライトネットワーク運営	企画展等の広報、展示評価	企業連携、外部資金獲得	ＳＮＳ等による情報発信
	教育普及担当	史跡ガイダンス、展示解説ガイドの育成、縄文体験・イベント・プログラムの企画・運営、学校連携、団体受入対応	展示の企画・実施、展示解説の企画・編集、企画展連携プログラムの企画・運営	－	学校連携、サテライト連携
	展示担当	常設展示の展示替え、企画展の企画・実施、資料収集、展示解説		－	展示解説・体験サポート
研究部門	基幹研究担当	縄文文化や貝塚に関する調査・研究、常設展示の展示替え、企画展の企画・実施		縄文文化や貝塚に関する共同研究、共同利用	調査・研究
	加曽利貝塚発掘調査担当	加曽利貝塚発掘調査、調査結果の整理・研究、常設展示の展示替え、企画展の企画・実施、		加曽利貝塚に関する発掘実習、共同研究	発掘・調査

4　「みんなでつくる・育てる博物館」に向けた考え方

・新博物館の整備にあたっては、計画段階から、市民やサポーターなどの参画を促進し、大学などの外部研究機関の協力により、多様な主体が活動しやすい施設づくりについて、みんなで検討します。

・開館後の運営に向け、複数の主体が関わる運営のしくみづくり、連携・ネットワーク強化に向けて、市民サポーター（担い手）、大学などの外部研究機関、学校連携、地域連携、などについて最適なあり方を検討します。



（1）博物館の研究資源化に向けた考え方

ア　収蔵資料等の活用

・収蔵資料に関する情報の公開・発信、パブリックドメイン化

・収蔵資料データベースや図書室の公開

・他館との展示連携など収蔵資料の積極的な公開・活用

イ　共同研究の導入

・大学や大学院などの研究機関との共同研究

・科研費をはじめとした外部の競争的資金の導入

・発掘データ、研究論文等の公開・発信、パブリックドメイン化

ウ　施設や史跡の活用

・大学・大学院などの研究機関との博物館施設や史跡の共同利用の推進

・発掘実習、博物館実習の受入

（２）市民協働の活性化に向けた考え方

ア　市民協働のしくみづくり

・「加曽利貝塚博物館友の会」、「加曽利貝塚土器づくり同好会」、「加曽利貝塚ガイドの会」、「加曽利貝塚自然観察会」、「坂月川愛好会」、「縄文の森と水辺を守る会」など実績のあるサポート団体の活動の継続・発展

・展示室における縄文体験をサポートする縄文キャスト、史跡公園や縄文の森を含めて見守りを行うパークガイドなど、新たな活動展開をするための人材の募集育成

・博物館を含めた史跡全体の運営支援のための、新たなサポート体制づくり

イ　広報

・加曽利貝塚とサテライト周遊を組み合わせたツアーなどに関する情報を、観光協会、民間企業と連携して発信

・市民やインフルエンサーによるＳＮＳでの情報発信を促進する仕掛け

ウ　史跡・公園管理

・加曽利貝塚のサポート団体と連携し、史跡・公園管理を推進

・公園で展開する体験プログラムの企画･運営

エ　調査・研究

・市民による調査・研究を支援

・市民との共同研究や共同利用の仕組みを導入

オ　展示解説

・博物館内及び史跡において、加曽利貝塚のサポート団体による展示解説ツールの開発や展示解説ガイドを展開

カ　学校連携

・学校教諭との共同による、カリキュラムと連動した施設見学プログラムを開発

・加曽利貝塚のサポート団体との連携により、学校団体受入体制を拡充

キ　サテライトネットワーク

・周辺エリアや市内文化施設、商業施設等との連携による連携イベントの開催

・電車・モノレール・バスなどの交通機関と連携した周遊プログラムの開発

・博物館や史跡を拠点としたイベント開催などの地域活性化

5　開館形態

より多くの市民や利用者が気軽に訪れることができるよう、開館日や開館時間、利用料金を検討します。

（１）休館日、開館時間

・資料や展示、施設の適切な管理を行う必要があることから、一定の休館日や特別休館日の設定は不可欠です。こうしたことを踏まえ、多くの人が利用しやすい休館日のあり方を検討します。

・開館時間は、管理運営の効率性と市民や利用者の利便性のバランスを勘案し、柔軟で弾力的な開館時間の設定を検討します。

（２）利用料金

・より多くの市民や利用者に気軽に繰り返し利用してもらうためには、無料で利用できるスペースが求められます。

・より本格的な体験などを実現するため、有料プログラムの導入を検討します。

・電車・モノレール・バスなどの交通機関と連携した周遊プログラムなどの導入も検討します。

・多様な連携を図るため、施設の貸出や資料の特別利用などの有料化を検討します。